

令和元年度
郡山市おもいやり作文コンクール
優 秀 作 品 集



郡 山 市

「令和元年度郡山市おもいやり作文コンクール」は、市内の小・中学生のみなさんが障がい福祉を考え、障がい者に対する理解を深めることを目的に実施しております。

今回御応募いただいた作品は、自ら体験し感じたことをもとに、障がいをお持ちの方に対する自分自身の考え方を見つめ直したもののや、障がい者にとって暮らしやすい社会のあり方を考察したものなど、素晴らしいものばかりでありました。すべての作品から、人を思いやる優しさや障がい者への素直な気持ちを感じられました。コンクールに応募いただいたみなさん、作品をお寄せいただきまして本当にありがとうございました。

今回のコンクールには、小学生の部一三六点、中学生の部一八五点、計三二二点の作品の応募をいただきました。

この作品集には、厳正な審査により選考された最優秀賞二作品、優秀賞八作品及び佳作九作品を掲載しております。この作品集を通じて、より多くのみなさんが、障がい者について理解と関心を深められ、また、障がい者福祉を考えるきっかけにしたいだければ幸いです。

結びに、コンクールの実施にあたり、児童・生徒のみなさんを御指導いただいた先生方、また、審査員並びに御協力いただきました関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和元年十一月

郡山市長 品川 萬里

もくじ

■あじさつ

■もくじ

■作品

【最優秀賞】

手話を広めたい
心のバリアフリーを築こう

郡山市立芳山小学校 五年 竹林芽咲
郡山市立郡山第一中学校 一年 小林杏奈

4 6

【優秀賞】

みんなが住みやすい街
みんなでやさしい気配りを
ろう者との交流
誰もが生きやすい社会にするために
実際に経験することで
世界にたった一つの石けん
思いやりのある明るい未来へ皆で社会を作ってる
人と人をつなぐ力

郡山市立芳山小学校 五年 伊坂菜花
郡山市立富田西小学校 四年 江川楓花
郡山市立大成小学校 五年 渡辺こまち
郡山市立郡山第一中学校 一年 小林優
郡山市立郡山第一中学校 二年 菅野涼羽
郡山市立郡山第一中学校 一年 飯谷梨央
郡山市立郡山第五中学校 一年 近藤愛歌
郡山市立郡山第六中学校 二年 石塚史

10 12 14 16 18 20 22 24

【佳作】

大丈夫ですか	郡山市立安積第二小学校	六年	佐藤	蓮	44
へアドネーションを通して	郡山市立高瀬小学校	五年	小林	莉	42
発達障がい者について	郡山市立芳賀小学校	六年	丹野	彩音	40
住みやすい世の中とは	郡山市立桜小学校	五年	高橋	心優	38
誰もが自分らしく生きる	郡山市立富田中学校	二年	菅野	明里	36
障がいのある人に何ができるか	郡山市立富田中学校	三年	角田	凜	34
心のバリアフリー	郡山市立緑ヶ丘中学校	二年	八代	麻友	32
私達にできること	郡山市立片平中学校	三年	佐々木	麗奈	30
理解の大切さ	郡山市立郡山第一中学校	三年	市村	麻結	28

■講評

■入賞者名簿

■作文応募状況

■実施要項

.....	47
.....	49
.....	50
.....	51

【最優秀賞】

手話を広めたい

私には、たくさんの方の耳の聞こえないお友達があります。そのきっかけは、お母さんが五年前から手話サークルに通いはじめたからです。耳の聞こえない人をろう者といます。ろう者は、手話で会話をするのでみんなが手話を出来たらろう者も、不便を感じることなく生活ができるのではないかと思います。昔はろう者の人たちが、聞こえる私たちに合わせるため、手話を禁止され、話している口の形を読み取り、話す訓練をしてきた時代もあったようです。しかし、ろう者の人たちが聞こえる人たちに合わせるのは本当に大変です。聞こえる私たちが、手話を覚えるほうが、ろう者とコミュニケーションをとりやすいと思いました。そのためにはどうすればいいのか考えました。

まず学校の授業の中で取り組めばいいと思いました。簡単な手話を覚えれば、ろう者と会った時に「ありがと」「や」「こんにちは」と手話でろう者とのコミュニケーションに役立つのではないかと思います。英語と一緒に、小さいころから手話にふれることで手話がもっと身近なものだと思えるので

郡山市立芳山小学校 五年 竹林 芽咲

はないでしょうか。

次に、大人にも手話を広めるためには、どうすればいいか考えました。いっしょにけんめい考えましたがなかなか思いつかなかったので、インターネットで調べてみました。すると今は、私も大好きなびっくりドンキーに手話の出来る店舗が四つあるそうです。また東京のスターバックスでは、朝から夜まで、店員さんが全てもろう者となんちよう者だけのスタッフで接客する一日限定のイベントが開かれたそうです。個人個人で手話の勉強をするだけでは、なかなか手話は広まらないので、お店や会社そして社会全体でろう者のことを考え取り組むことにより、手話が広まると思います。

私は、今も手話サークルに通っています。お母さんに、すめられ手話検定試験五級を二年前、四級は昨年受験し合格しました。今年は、三級に挑戦します。また、去年は県の手話スピーチコンテストに出場して準優勝しました。自分への自信にもつながりました。サークルのろう者の友達やみんながいっしょに喜んでくれました。しょうらいにもいかにしたい

と思うようになりました。できたら、全国高校生手話スピーチコンテストか、全国高校手話パフォーマンスに出てみたいです。

私の将来の夢はろう学校の先生になることと手話を多くの人たちに広めることです。その夢をかなえるため手話をこれからも楽しく続けていきます。

心のバリアフリーを築こう

少子・高齢化社会と言われる時代の中で、「バリアフリー」という言葉をよく聞きます。障がい者や高齢者が不自由なく生活できる環境作りが、郡山市でも進められています。

私が毎日通う中学校までの通学路にも、音の出る盲人用信号機がいくつか設置されていて、視覚障がい者のための施設の工夫があります。身近な公共施設でも、点字ブロックや音声ガイドの案内、段差のない床など、バリアフリーの積極的な取り組みがされています。

私が障がいということを身近に考えるようになったきっかけは、祖母が車いすでの生活をしているからです。会津に住んでいる祖母は、昔ながらの割烹料理の店を営んでいて、私が三才の時に、突然『脳内出血』という病気で倒れました。半年間入院してやっと退院できましたが、左手と左足に麻痺が残り、車椅子に乗らないと生活ができなくなりました。

トイレに行く時も、電話に出る時も車椅子で行きます。そ

のため、会津の祖母の家は、障がいを持つ祖母にとって生活しやすい工夫がたくさんあります。家のあちこちに手すりがあり、廊下が広い造りになっています。

祖母は、動かなくなった左手が少しでも使えるように、リハビリを続けています。動かなくなった左足で、一歩でも自分の力で歩けるように、杖や手すりを使って必死に歩く練習をしています。リハビリが終わるといつも、大きな息をはきながら車椅子に倒れるように座ります。私が歩いたり走ったりすることは簡単なことですが、体が不自由な祖母にとって、リハビリは体に大きな負担がかかって、とても大変なのだと思えます。だから、リハビリが終わった後の祖母の顔は、とても疲れています。

祖母がリハビリをがんばるのには、わけがあります。倒れる前の時のように、祖父と共に大好きな調理の仕事をしたいのです。祖母は昔から働き者です。よく口癖のように、「ば

あちゃんは、生涯現役！お客さんが、うまいって喜んでくれる料理を、ずっと作り続けたいんだ。」と言います。働くことが大好きな祖母は、前のように体が自由に動かなくなっても、お客さんにおいしい料理を作りたい、と思うあたたかい気持ちがあるんだなと強く感じました。生き生きと働く私の祖母は、車椅子の料理人なのです。

私は今、バドミントン部に入っています。「一本でも打ち返せるように、技を磨きたい。」と思い、毎日練習に取り組んできました。しかし、初心者私にとって、いつも相手が強そうに見え、自分に自信がありませんでした。でも、先生や先輩が丁寧にシャトルの打ち方を教えてくださったり、遠くに返されたシャトルも粘り強く追って打ち返す大切さを学んだりする中で、次第に「がんばるぞ」と思う強い気持ちが湧き上がり、放課後や暑い夏休みの練習にも打ち込むことができました。そして、シングルス初めての大会で準々決勝まで進めた時、たくさんの仲間の応援に支えられているうれしさと、これまでの練習の成果を発揮できた大きな自信がこみ上げてきました。

体の不自由な障がい者にとって、やりたいことが自分でできるようになった時のうれしさは、私を感じた気持ちと同じなのではないでしょうか。そのうれしさが、祖母のようにやりがいや自信につながるのだと思います。

障がい者にとって生活しやすい設備はもちろん必要です。しかし、真のバリアフリーとは、困ったときはお互いに声をかけ、励まし合って生きていくことが、社会の中で共に生きる私たちにとってより大切なのだと考えます。

声をかけ合い、「相手を知る」ことで、安心感が生まれるのです。互いの違いを認め合い、思いやりの心で支えられる、心のバリアフリーを築いていきたいです。



【優秀賞】

みんなが住みやすい街

郡山市立芳山小学校 五年 伊坂 菜花

私には二年前病気で急に目が見えなくなってしまったおじいちゃんがあります。それまで目が見えない人や耳が聞こえない人、手や足が不自由な人など見かけたことはあっても障害があるということについて考えたことはありませんでした。おじいちゃんの目が悪くなってから街で同じ障害を持った人がいると、大変なんだろうなと思うようになりました。私自身も大変だったり困ったりしたことがあったので、障がいのある人もそのお世話をした人も、その他の人もみんなが同じように暮らしやすい街になったらいいのと思います。

おじいちゃんの目が見えなくなって家でも外に行くときでもずっと付き添わなければいけないことがとても大変でした。お店で人にぶつかってしまつと危ないし、一人ではどう歩いていいか分からないのでスーパーなどに行ったときはぶつからないように誘導してあげました。目が不自由な人が一人で白い杖を持って歩いているのを見たことがあります。おじいちゃんもそついう風に歩けたらいいのと思います。

したが、特別な練習をしなければならなくて、一人で歩けるようになるまではとても時間がかかるので、おじいちゃんの前では難しいそうです。だから、車いすで連れていくこともありました。その時は車いすが通れるお店かどうか、車いす用のトイレや駐車場があるかどうかなどお母さんは事前に調べていました。車いすだと買いたい物に手が届かなかったり、車いす用の駐車場に普通の車が停まっけていて止められなかったり、各スロープの所に自転車やカートが置いてあると通れないことがあつても困りました。このことはおじいちゃんのお世話をしなかったら分からなかったと思います。普段、私たちは苦労していないことも障がいをもった人たちにとっては大変なことが多いと分かりました。

私は障がいのある人も、住みやすくするために工夫することが必要だと思いました。私の家では、家の中で一人で歩けるように柱や手すりに手すりを付けました。おじいちゃんはずの音を目印にして、どの場所にいるか分かるようにしました。最初はずつと説明しなければならなかったけれどだん

だん覚えて、部屋からリビングまで一人で来られるようになり
ました。ちょっとした工夫でもおじいちゃんは便利になり、
ひとりのできるようになるんだなあと思いました。

目の見えない人は音の出る物が頼りです。おじいちゃんも
腕時計やパソコンを読み上げてくれるものを使っていて、と
ても便利だと言っています。信号など街の中にも目が見えな
い人のために音の出る物がたくさんあります。私は音が出る
杖があったらいいなと思いました。危ない物があつたら知ら
せてくれたり、行きたい道を登録すると道を案内してくれ
たりする杖です。それが開発されたら、目が見えなくても一人
で歩ける人が増えると思います。

いろいろな道具が開発されるのはもちろんですが、私はも
っと人と人が助け合えばいいと思いました。障がいにはた
くさん種類があるし、年をとってから障がいを持つ人もい
れば生まれた時から障がいがある子もいて、それぞれ困ってい
ることも違います。私もおじいちゃんのお世話をしていた時、
道をゆずってもらったりした時はとても嬉しい気持ちにな
りました。

障がいがあるないに関わらず、困っている様子の人がいた
ら「どうしましたか?」「大丈夫ですか?」と声をかけられ
る人が増えたらみんなが安心して住みやすい街になると思
います。私もおじいちゃんのことを生かして、困っている人

を助けてあげられる人になりたいです。

みんなでやさしい気配りを

わたしのおじさんは、難病に指定されている、筋ジストロフィーという病気です。この病気は、身体の筋肉がこわれやすく、再生されにくいので、筋力の低下によって身体を動かすことがむずかしくなる病気です。今もなおす方法が見つかっていません。わたしは、おじさんを見ていて感じたことを考えたいと思います。

おじさんは今、歩くときに杖を使っていて、時々車いすに乗っています。立ち上がる時は手すりを使ったり、かべに手をついたりしてゆっくり立ちます。階段や段差があるとろは歩けません。重い物を持つことや運動をすることもむずかしいです。だから、毎日の生活の中で、できないことやむずかしいことは、おじさんと一緒に住んでいる私の祖父母が手伝っています。でも、生活しやすいようにいろいろな工夫をしています。たとえば、玄関にはスロープがあって、歩きやすくなっています。そして、一人で家にいる時にインターホンが鳴ってもすぐには立てないので、応答する前に帰られてしまうことがあったそうです。そのために、座ったままで

郡山市立富田西小学校 四年 江川 楓花

も応答できる、子機型の物を設置したそうです。家出できる工夫もありますが、外に出ると障がい者の方が利用できるトイレや駐車場を見たことがあります。最近できた大型ショッピングセンターには、車いすのかたでも利用できるように、通常より低い自動販売機がありました。様々な施設や場所でも、バリアフリー化が行われていますが、実際におじさんが車を運転して障がい者用の駐車場に停めようとする時に、すぐ隣に自転車置き場があって、自転車がはみ出て止められていて、駐車できないことがよくあるそうです。駐車場が混んでいる時には、少しの時間ならいいだろうと、車を停めてしまう方もいるようです。せっかく、こうしたスペースが設けられているのに、利用できるはずの人が利用できないのはとても残念なことです。障がい者の方が困らないように、ルールを守ってほしいです。

昨年、わたしの家族とおじさんと祖父母で温泉旅行に行きました。事前に電話で確認して、温泉に入る時は介助者がいれば大丈夫でしょうと言われていました。でも実際に行って

みると、段差が多く手すりも一部しかなかったため、おじさんは温泉に入ることができませんでした。そのため、宿泊する部屋についていたお風呂に入りましたが、そのお湯は沸かし湯で温泉ではありませんでした。大浴場以外のお湯は温泉ではないそうで、温泉に來たのにとてもかわいそうだなと思いました。身体が不自由だと、いろいろな面でよく確認することが必要で、実際に目で見て確認しなければ、分からないこともあると分かりました。

今回わたしは、おじさんを通して障がい者について考えましたが、一人一人が相手の気持ちになって行動できるような、やさしい気持ちを持ってほしいです。そして、みんなにやさしい町になるように、まだまだバリアフリー化が必要な場所がたくさんあると思います。また、障がい者の方のお手伝いをする時は、本人にどうしてほしいか聞いてから手伝いしましょう。たとえば、立ち上がる時に手伝おうとする時、わきの下をかかえることが多いと思います。でも、本人からすると、それはかえって立ちづらくなることもあるそうです。だから、まずは話を聞いてあげることが大事だと思います。わたしは、障がい者の方がこまることなく、楽しく安全に暮らせるように、気を配れる人になりたいです。

ろう者との交流

わたしは、二年生の時から手話を習っています。

手話を習ったきっかけは、お母さんに手話サークルに誘われたことでした。初めて行った時、とても驚きました。理由は、手で会話をしていたからです。手で会話をしていたのは、耳の聞こえない人たちでした。表情豊かに笑顔で手を動かしていたけど私には何を話しているのか分かりませんでした。そして、耳の聞こえない人たちのことを「ろう者」ということを、この時初めて知りました。

最初の頃は、ときどきしてしまい、手話通訳の仕事をしているお母さんにたよってはかりいて、ろう者の人たちと話をせずにあげていました。でもろう者の人たちはやさしくて、おいでと言ってくれて分からないところは、絵や、ゆっくりと指文字で表して教えてくれました。そして少しずつ手話を覚えることが出来ました。

サークルでは、グループに分かれて勉強しています。私は少し手話を覚えたので、グループに入って、他の人たちとい

郡山市立大成小学校 五年 渡辺 こまち

つしよに手話を学び始めました。

また、サークルではいろんな行事をおこなっています。春はお花見、夏はボウリングや交流会やうねめ踊り、秋は福祉フェスティバルや手話祭り、冬はクリスマス会などです。福祉フェスティバルでは、ステージの上で手話コーラスや手話劇などの発表をおこないます。私も参加して、ドラえもんやおよげたいやきくんなどの歌を発表しました。観客席にはたくさん人がいて、最初はとても緊張しましたが、発表しているうちに、楽しくなってきた、緊張がほぐれてきました。また、観客席の人もいつしよに手を動かしているのを見るとうれしい気持ちになり、もっと多くの人に手話を覚えてもらいたいと思いました。サークルでは、大きなイベントの一つに手話祭りがあります。手話祭りは、中央公民館やミューカルがくと館などで、盛大に開催され、耳の聞こえない世界の体験や手話での絵本や読み聞かせなど、楽しい内容となっています。私は、ピエロになって来場したお客さんにふうせんを

わたしながら、手話祭りの案内をしました。「ありがとう。」
と言ってくれる人がたくさんいてうれしくなりました。今年
は、日和田シヨッピングモールで開催されるので、たくさん
の人に手話の楽しさを知ってもらえるようにがんばりたい
と思います。

また、三年生の時、手話検定試験五級に挑戦しました。こ
の時も、ろう者の人たちは、分からない単語を教えてください、
スピーチを見てくれたりと、試験にむけての勉強を応援
してくれました。おかげで五級に合格することができました。
四年生では、四級に合格することができました。今年は、三
級に挑戦します。

私は、手話を習い始めて、手話は大切なコミュニケーション
だと分かりました。学校でも手話の授業があったらいいな
と思います。ろう者の人たちが安心して暮らせるように、も
っとたくさんの人に手話を覚えてほしいです。

誰もが生きやすい社会にするために

郡山市立郡山第一中学校 一年 小林 優

ふつうってなんだろう。ふつうって決めるのはだれなんだろう。だれもがよく使っている「ふつう」という言葉。でも、その意味についてよく理解していないことに気づきました。気になったので辞書で調べてみました。

ふつう【普通】①どこにでもあるような、ありふれたものであること。一般。↕ 特別。②たいていの場合。

私はこれを見て疑問をいだきました。

「障がい者は、普通じゃないの？」

確かに健常者からすれば、障がい者は、普通ではなく感じるかもしれません。でも、その普通は、何かで測れるわけでもありません。だれが障がいを持っていない人が健常だと決めたのでしょうか。では、障がい者が普通でないとしたら、反対の意味の特別？だとしたら、とても良いことではないでしょうか。確かに障がい者には、とても特別ですごい所を持っている人がたくさんいます。私は、前にどこかで聞いたことのある話を思い出しました。それはこんな話です。

ある学校の理科室でねずみが逃げ出しました。みんなで探

し回っても見つかりません。そこで、先生はみんなをろう下に出して静かにさせました。先生は目の見えない一人の生徒を呼びます。他の生徒達は口々に言いました。

「目が見えないのにねずみを見つけ出せるわけじゃないじゃないか。」

しかし、目の見えない生徒はすぐにねずみを見つけました。目の見えない生徒は人一倍、耳が良かったのです。そのことを先生は、よく知っていたのです。

その話を思い出して私は気づきました。普通がいいとか、普通じゃないとだめとかは、勝手に思い込んでいただけなんだということ。何が普通か決めるのは人それぞれだということ。もしかしたら、先ほどの話の目の見えない生徒からすると、その優れた耳は、普通なのかもしれません。結局普通というものは、自分自身で決めるものなのだと思います。私は、「普通はこういうもの」と決めつけないでいきたいと思いました。そして先ほどの話の先生のように障がい者のできないところではなく、できるところを理解し、認めている「本当

の優しさ」を持った人になりたいです。

私は障がい者を「かわいそうに」とは思いません。障がい者イコールかわいそうというイメージがある人も多いと思います。でも、「かわいそう」というのは、本当の優しさでもないし、障がい者のことを知らないから言えるのでしよう。私は幼稚園のころ仲の良い友達がいまして。その友達は、できないこともありましたが、とても素敵な絵を描く女の子でした。一人の人間としてとても輝いていました。その後、その友達は引越すことになります。その時に心をこめて書いてくれたお手紙をもらったとき、とても嬉しかったです。今でもその手紙を大事に持っています。大きくなってから知ったのですが、その友達はダウン症だったそうです。その友達はたくさんの幸せを私にくれました。確かに障がい者は、できないこともあるかもしれませんが、でも、私だったら、それをかわいそうと言ってほしくありません。できない所は助けあう。そんな人がもっともっと増えたら、みんなが生きやすくなると思います。一人一人の小さなおもいやりが、みんなにやさしいまちを創っていくのです。

私は、障がいのある人と、障がいのあるなしに関係なく、一人の人間として関わっていききたいです。人はだれもが世界に一人しかいない特別な存在。そのことに、健常者と障がい者で違いはありません。一人一人心の中にあるバリアを壊せ

ば、障がいに関わらず、みんな協力し合える社会になっていくはずです。バリアフリーのおもいやりにあふれた素敵な未来になっていくことを心から願い、自分自身も心がけていきたいと思えます。

実際に経験するにつれて

私のおじいちゃんは障がいを抱えて、約一年がたちました。昨年までは、食事やお風呂にとても手こずっていましたが、最近慣れはじめています。でも今でも慣れない部分は会話です。おじいちゃんとの会話は、筆談用ボードや電気式人口喉頭などを使っています。電気式人口喉頭にはまだ慣れていないため、主に筆談用ボードを活用しています。昨年よりも笑顔が増え、元気に生活しています。

昨年度末におじいちゃんは、「北海道に行きたい」とボードに書き、家族に見せていました。おじいちゃんがどこかに行きたいと、自分で言うのは何年かぶりです。障がいを抱えてからは初めてのことでした。だから家族全員で北海道に旅行予定を立てました。おじいちゃんも「かにかが食べたい」など自分の気持ちを伝えてくれてうれしかったです。そして今年の夏休みに北海道へ旅行に行きました。おじいちゃんも楽しそうでした。でも時々不満そうな顔をするところがあり、どうしたの？と聞いても悩んだ顔をして手でもなんでもなによとジェスチャーしていました。その後伝えなかった内容

郡山市立郡山第一中学校 二年 菅野 涼羽

が分かりました。車いすを指してボードに「つかれた」と書いたからです。車いすにおじいちゃんを乗せて観光することにしました。私が車いすを押しました。押している時に、足も弱くなって体力も減っていて不安な気持ちでした。それでも笑顔でおじいちゃんは、このお店に入りたいと書いたりしてすごく安心しました。道を歩いたり、お店の中に入ったりしてみても思ったのですが、車いすで移動することはすごく大変でした。その理由は二つあります。

一つ目は店内の通路です。歩くにはせまくないのですが車いすを通るとするとせまく、商品にぶつかってしまうことがあります。落としてしまったり、角がせまいとカーブを曲がるのが困難でした。

二つ目は段差です。車いすで段差にのるとポコッとゆれてしまったり、つかかかってしまったりして押すのが大変でした。

おじいちゃんの車いすを押しているいろいろな所へ出かけたことによって、障がいを抱えた人が日々どれだけ大変なのか

を知ることができました。それを知って私は、バリアフリー化に力を入れるべきだと思いました。バリアフリーとは、障がいを抱えている人や高齢者が生活していくうえで、物理的な障がいや精神的な障壁を取り除くための施策のことです。そうすれば、みんなが住みよい環境に一步步近づいていくのではないかと思います。例えば点字ブロックや手すりなどです。それらは障がいを抱えている人にとって、とても大切なものです。

私はこうして障がいを抱える人のために考える機会が増えるようになったのも、日常的に関わることが増えたからだと思います。今回の旅行では、日常的に気づかない障がいを抱える人にとって不便なところがたくさん目につきました。このように文章にすることで、障がいを抱える人と関わる機会が少ない人にも、不便なところを知ってもらえたら良いと思います。障がいを抱えている人も安心・安全に過ごすことのできる社会を実現するために、私でもできることをしっかり考え、行動していきます。

世界にたった一つの石けん

ある日の早朝、テレビで色鮮やかなフルーツやケーキが目に飛び込んできた。それは石けんだった。この石けんを作っていたのは障害のある人だ。本物そっくりの果肉や皮、小さなタネまですべて手作りだ。

神奈川県小田原市にある会社のモットーは「障がい者だからできないと決めつけない」こと。会長の神原さんは、仕事を通して自分の可能性を発見してほしい一心で彼らと向き合ってきた。「障がいのある人として人生の中で自分自身を認められるシーンはすごく少ないと思う。でも、一緒に働いてみると、よっぽど彼らのほうが生きることには真剣だし、働くことに貪欲だし、ひたむきだ。」という。

三十一人の従業員は、知的障がい者、精神障がい者、身体障がい者の人達が働いている。得意不得意は人それぞれ。能力に応じて仕事を分担している。月に二万個の石けんを手作りしている。

本物そっくりのフルーツ作りは、一番難しい作業だ。ある程度仕事をしてきた人には新しい仕事を覚えてもらうこと

郡山市立郡山第一中学校 一年 飯谷 梨央

をしている。同じ作業を続けるのではなく、新しい仕事にも挑戦する。それがこの会社の方針だ。

抜擢された朱里さんは不安ながらも挑戦することを決めた。覚えることが苦手な朱里さんは、小さいころから何をやるにも同級生より時間がかかっていた。会社に入ってからも後輩に追い越されてきた。でも、無遅刻、無欠席のがんばり屋でもあった。

神原さんは、そんな朱里さんをずっと見続けてきた。石けん作りを始めた当初、包装は手で行っていた。どんなに早くできる人でも一個二分はかかる。それを朱里さんは誰よりも早くきれいに仕上げることができた。つまり、一度完璧に覚えてしまえば他の人には負けないくらいの生産力と技術力を発揮できる人だということだ。

大事なのは、自分自身の頭で考えること、朱里さんが覚えやすい言葉や表現を使って教えていた。また、動画を撮ることでも何度も確認できるようにしていた。

神原さんは、もともと大手のIT企業の人事部長で障がい

者の雇用を任されていた。当初障がい者に対して勝手なイメージや偏見があったという。全国七十カ所の事業所を訪ね歩いた。長野県の石けん工場に行ったとき、自立するくらいの給料をもらい、任された仕事に誇りをもって働く姿に衝撃を受けた。

二〇一〇年、十六名の障がい者を雇い、会社を設立。作った白いせっけんは売れなかった。試行錯誤のうえ、デザインの工夫をした。

彼らは、どんなに難しい要求にも答えようとする姿がそこにはあった。その向上心に驚いた。

二〇一六年フルーツ石けんを開発。口コミやSNSで広まり、年間二十万個を売る看板商品になった。

障がいのない人は、人が嫌だ、会社が嫌だと言って転職できる。しかし、働きたくても働けない障がい者の立場は全然違う。働くことの重みが違う。だからこそ彼らは真剣に働いてくれる。そういう彼らと一緒に働ける僕は幸せだし、すごいエネルギーをもらっていると神原さんは言う。

私は、この番組を見て障がい者の置かれている厳しい現実とそれを支える温かい人と会社があることを知った。

失敗しただけうまくなる。
人は必ず成長する。

この言葉は障がい者だけでなく、私にもあてはまることだ

と思う。近い将来、障がい者の方と一緒に仕事をする事になったら私も一緒に成長していけるように心がけたいと思う。

思いやりのある明るい未来へ皆で社会をつくって

郡山市立郡山第五中学校 一年 近藤 愛歌

私の母は特別支援学級の先生です。私が二年生くらいの頃は支援学校の先生でした。幼い私は母にどんな仕事をしているの、と尋ねたことがありました。私はそれまで、体の不自由な方というと、なんとなくガラス細工のように触れられない遠い存在、というイメージがあったのですが、母が話してくれた支援学校の話は「触れられない遠い存在」のイメージを吹き飛ばすような生き生きした支援学校の話でした。私とは少し違う才能の話や、少しずつ進歩する生活の話……。私は聞いていくうちに、「母の生徒さんは、ちょっと個性が強いだけで、遠い存在ではない」ということに気がきました。それから、弟と二人で母に毎日のように、その日のことを聞くようになりました。私は、母の話から分かる、生き生きとした生徒さんから、知らないうちに元気をもらっていた気がします。

そして去年、私は運動会での全校ダンスを考え、教える係になりました。そこで、学校の支援学級にもダンスを教えに行くことになりました。一年生が三人のクラスです。休み時

間、私が「ダンスしよう」と声をかけると、三人のうち二人の顔がぱっと輝きました。私は「待っていてくれたんだな」と思い、うれしくなりました。音楽が流れてくると、ふりつげはあつていなくても、とても楽しそうに踊っていました。私は「母の話に一つもかざったところが無いばかりか、それ以上に生き生きしている」と思いました。わたしは支援学級にいる下級生が、六年生よりも楽しそうに踊ってくれているのを見て、とてもうれしかったです。やりがいを感じるので、当番でない日も毎日のように行って、踊りました。そうしているうちに、初めは踊らなかつた一年生も一緒に踊ってくれるようになり、私はとても大きなやりがいを感じ、より頑張ろうと思えるようになりました。運動会も無事に終わり、ダンスのふりつけもとくに忘れてしまった冬、支援学級の子が一人転校することになり、私はお別れ会に呼ばれました。そこで、皆で踊ることになり、転校する子の提案で運動会で踊ったダンスをしました。考えた私よりその子の方がふりつげを覚えていて、私は驚きました。そして私が母の話で感じ

た事にもう一つ考えをつけ足しました。個性的なだけではなく、私よりも優れたところもあるということです。優れたこともあり苦手なこともある、それは私と同じだということを感じました。「普通」とは私が感覚で勝手に引いた線であり、世の中で決められていることではありません。それに、人間には一人一人個性があります。出来ることと、出来ないことがあって当たり前ではないでしょうか。私達は、困ったことがあると互いに助け合います。そして、障がいがある方は助ける回数が少し多いだけで、触れてはいけない遠い存在ではありません。それに、障がいがある方だからそのアイデアや、能力で、私に力をくれることもあります。個性的な面も確かにあり、その個性で困ることもあるかもしれませんが、周りを元気にすることもあるのです。

私も友達や家族にも得意、不得意があり、性格も人それぞれです。私達は常に自分とは全く違う人とともに生きています。障がいがある方もそのうちの一人であり、皆で社会をつくっています。色んな性格を持った人たち一人一人が共に助け合い、尊重し合いながら、生きていくことが、明るく思いやりのあふれる未来へとつながっていくのではないかと思います。

人と人をつなぐ力

郡山市立郡山第六中学校 二年 石塚 史

私には、耳が不自由な祖父がいます。祖父は幼児期の高熱のために聞こえが悪くなり、祖母は生まれたときから耳があまり聞こえなかったそうです。祖母と生活する中で、私が大変だと感じていたのは、もちろんコミュニケーションをとることで。祖母に自分が伝えたいと思ったことを伝えるのは、幼いころは特に大変だったのです。どうすれば祖母に伝えたいことを伝えられるのか？小学生になった私に、祖母は手話を教えてくれました。伝えたいことを手話で伝えると、たった一度のやり取りでスムーズに伝わる、当たり前のことですが祖母とのコミュニケーションは大変だと思っていた私は、驚き、そして大きな感動を味わいました。コミュニケーションをとることで、人はつながることが出来ます。私の祖母のように障がいをもっていても、使う言語が違ってても、コミュニケーションをとることができれば、いい関係をつくることができます。

手話で祖父母とコミュニケーションをとるようになり、その大切さや喜びを実感した私ですが、実際自分が思っている

ことをその通りに上手に伝えることは、簡単なことではありません。家族でさえそう思うのですから、まして初対面の人とコミュニケーションをとることはとても難しいことなのだと思います。耳が不自由な人とは手話、外国の方とは英語やそれ以外の言語で伝え合う必要もあり、習得の苦労もあります。手話や外国語を習得するのは、本当に大変で長い時間がかかります。でも、つながりたい誰かがいたら、習得の大変さも喜びに変わると思います。私自身も一つの手話を覚えるたびに祖父母とコミュニケーションがとれたり、喜んでもらえたりする喜びがあり、大変励みになりました。そしてこの経験から、私は今、外国語の習得を目指しています。将来、外国の人と楽しく会話してみたいと思っています。まだ見ぬ多くの人とつながりたいと思う強い気持ちは学習の原動力になっています。

コミュニケーションの能力は、高い人と低い人がいます。私の母はコミュニケーション力が非常に高く、私はそんな母を尊敬しています。母は、優しい気持ちの持ち主です。いつ

も私や周囲の人の気持ちを良く考えてくれています。そして、それを伝えるのが上手です。私が失敗して落ち込んでいる時には、すぐに気づいて励ましてくれます。母に言葉をかけられると母の優しさに包まれているように感じて、とても安心します。そして、「大丈夫。また頑張ろう。」と思えます。また、私が初めて連れてきた友達とも、母はすぐに仲良くなっ
てしまいます。そして、前からの知り合いのように私がいなくても、笑顔で楽しそうに会話を始めてしまいます。相手を楽ししいと思うことを話題にしたり、安心させたりするのが本当に上手です。母は、耳が不自由な両親に育てられたおかげで、言葉を超えた部分で人とつながる能力を身に付けたのではないかと思えます。そして、両親の代わりに多くの人と言葉
を交わす中で、その能力を高めたのだと思えます。

この母の姿から私は、コミュニケーション能力の高さとは、ただ言語能力が高いということだけではないということに気づきました。手話ができ外国語が話せても、相手を気遣う
気持ちがないければ、人とつながることはできません。相手を気遣う力が人をつなげる力の基本です。このことを肝に銘じ、障がいをお持ちの方や外国の方々とも、積極的につながって
いきたいと思います。



【佳作】

大丈夫ですか

郡山市立安積第二小学校 六年 佐藤 蓮

あなたは、ヘルプマークを知っていますか。

家族で北海道へ行ったときのことです。横断歩道の信号待ちをしていました。私達の前にヘルプマークをつけている方がいました。私は、テレビでヘルプマークの存在を知っていました。ヘルプマークとは、障がいがある方がつけているものです。私達の前にいる方は友達と楽しそうに話していました。全然障がいがあるようには見えないのです。私は、ヘルプマークを「障がいがある方がつけるもの」としか分かりません。だから、くわしく知りたくなりました。

ヘルプマークとは、援助や配慮を必要としていることが外見からは分からない方々が、周りの方に助けを必要としていることを知らせることで、援助を得やすくなるよう作られたマークです。確かに、元気だった方が急に倒れたり、子供が迷子になったりしたら大変です。でもヘルプマークがあればすぐに状況が分かり対応しやすくなってとても便利だなと思いました。

ストラップタイプのヘルプマークには、裏面に緊急連絡先

や障がい・病気の特徴・症状に合わせて必要不可欠な内容を書き込むことができます。利用者の家族はとても安心だと思っています。

ヘルプマークの対象者は妊娠初期の方、義足をつけている方、人工関節を使用している方、内部障がいがある方、助けを必要としていることが外見から分からない方々です。ヘルプマークを必要としている方はたくさんいるなと思いました。

さて、ヘルプマークをつけている方に私達ができることは何かあるでしょう。

まず、一番は障がいのある方を優先席に座れるようにしてあげることです。外見から障がいがあることが分からない方が優先席を利用していると、見た目は周りの人と変わらないので、白い目で見られることがあります。そういった方々のために、ヘルプマークは作られたのです。

次に、困っている場合には見守ってあげることです。それだけでも障がいのある方は安心できると思うのです。それで

も、助けを必要としているならば、声をかけてあげましょう。最後に、ヘルプマークの存在をみなさんに知ってもらおうということ。まだ、ヘルプマークを知らない人はたくさんいます。私の家族も知りませんでした。だから、みなさんに知ってもらおうことで、障がいがある方はいろいろなところに出かけやすくなったり、バスや電車の優先席に座りやすくなったり、世界が広がります。

来年は東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。郡山市にも外国人やいろいろな人が訪れます。私は、みなさんがヘルプマークをつけている方、また困っている方全員に優しくなれる郡山になってほしいと願っています。東京オリンピック・パラリンピックに向けて、みなさんにヘルプマークの存在を知ってもらえるように、周りの友達や先生方に教えてあげたいです。

あなたの周りに助けを必要としている人がいるかもしれません。そのときは、やさしく手を差し伸べてあげてください。私も恥ずかしながらずに勇気を持って声をかけたいです。

「大丈夫ですか。」

へアドネーションを通して

郡山市立高瀬小学校 五年 小林 綾莉

病気の人に力を貸したい。そんな気持ちがあっても、実際に力を貸すのは、とてもむずかしそうだと思っていた。そもそも、「力を貸す」とは、どんな風にやるのだろうか。子どもでも、力を貸せるのだろうか。子どもでも、やれることはあるのだろうか。

私の友達は、病気で、かみの毛がほんの少ししか生えていない。だからいつも、ウィッグをしている。その子を見て、かわいそうだと思った。自分の長いかみを見て、あの子に申し訳ないと思った。お母さんにその子のことを話すと、インターネットで何かを調べ始めた。

「こんなのがあるよ。」
と見せられて、「何だろう。どついう意味だろう。」と思った。モニターに写っていたのは、「へアドネーション」という文字だった。私は、「どついう意味なの。」とお母さんに問いかけた。すると、お母さんは説明してくれた。へアドネーションというのはかみの毛を病気の子に寄附する、という活動のことだそうです。「寄附なんて、正直あまりしたくない。お母

さんが毎日結ってくれた、思い出がしまったかみの毛なものもったいない！」と思った。

「少しだけなら、私もやってみよう。」

少し切るだけ、という条件を付け足して言うと、お母さんは、「三十一センチメートル切らないと、ウィッグにできないよ。」

と言った。「かみが短いのは、絶対にいやだ。学校でからかわれてしまう。」心の中で文句をぶつぶつと言っていたら、友達の悲しそうな顔が心の中をよぎった。「自分のことより、友達のことを考えてあげたい。」そんな気持ちがいじわりとあふれ出てきた。お母さんに、

「かみを切っても良いよ。」

と伝えたら、お母さんも、心の中の友達も、二人が笑顔になった。いつのまにか私も笑顔になっていた。

その後、私は美容室で、かみを切って、へアドネーションをした。最初はいやだったかみを切ることだったけれど、切ったらとてもすっきりした。

へアドネーションを通して、二つのことを知った。一つ目が、病気の子や、人に力を貸すのは、そんなにむずかしくないということだ。二つ目は、自分のことより友達のことを優先してあげると、自分もうれしくなるということだ。

この経験を生かして、他の子にも、力を貸してあげたいと思った。

発達障がい者について

郡山市立芳賀小学校 六年 丹野 彩音

世の中には、ふつうの人ばかりではありません。「発達障がい」というものもっている人もいます。

私も自閉症スペクトラムという障がいをもっています。三年生までは、通常学級にいましたが、四年生からは、特別支援学級にいます。何を困っていたかというところ、いろんな勉強についていけなかったり、先生や友達の話がよく理解できなかったりしていました。ですが、支援学級に入ったら、成績が上がったり、友達ができたりしました。

実は、弟も自閉症スペクトラムの障がいをもっています。私と同じ自閉症スペクトラムですが、特性はちがいます。一つ目は、こだわりがとても強いことです。いつもとちがうとパニックを起こします。二つ目は、体の感覚が鋭感なことです。耳そうじをものすごく嫌がります。「耳」と言っただけで、逃げます。三つ目は、初めての場所やものが苦手なことです。すぐにパニックを起こしています。

そんな、毎日困っている弟ですが、行っている対処法があります。

いつもとちがうとパニックを起こしてしまうので、一日の予定表を作っています。絵カードを使って、具体的に見せています。例えば、「朝ごはん」「学校」「お風呂」「買い物」などです。耳で聞くだけではなく、目で見るとわかりやすくなるようです。

耳そうじを嫌がってしまうときは、無理にやらずに、たまにタオルでふくようにしています。お医者さんからも無理にやらなくていいと言われています。少しずつなれるように自分でタオルでふけるようにしています。

初めての場所やものは、実際の写真やカードを見せています。それによって、混乱せずにできることもあります。本人のタイミングを待つことも大切です。

私のクラスのみんなは、いろんな特性をもっています。大きな音が苦手だったり、においに敏感な人がいます。話が止まらない人、負けず嫌いな人、話についていけない人、いろんな人がいます。みんな性格はちがいますが、だからこそ楽しいんです。

このように、世の中には、「発達障がい」というものをもっている人がいます。障がいがあっても、ちよつとした工夫で、対処できます。また、特性がちがっても、みんなと仲良くすることができます。みなさんも発達障がいの者を知って、ぜひ仲良くなってみませんか。

住みやすい世の中とは

郡山市立桜小学校 五年 高橋 心優

「心と体のバリアフリーって何？」

私は、体の不自由な人たちが、もっともっと住みやすい世の中になってほしいと思っています。なぜ、そう思っているのか、それは、無くなった私のひいおばあちゃんも体が不自由だったからです。私が大好きだったひいおばあちゃんは、「のうこうそく」という病気で体の右側半分に「まひ」がありました。食事をとる時、服を着替える時、歩く時、とても不自由だったことを覚えています。それで、もっとひいおばあちゃんと同じ状況の人を助けたいと感じるようになりました。

私もそういう人たちのために、どういう世の中になってほしいか考えました。その中で、こんな風になったらいいなと思ったものを紹介します。

一つ目は、スロープがある施設をもっと増やすことです。私たちの町には、階段・段差がたくさんあります。しかし、車いすの人、足が不自由な人がそこをたくさん歩くのは大変だと思います。だから、スロープがある施設がもっと増えた

ら車いすの人達も足の不自由な人達も歩きやすいし、みんなが住みやすい世の中にもなると思いました。

二つ目は、道を広くする事です。道が狭いと、体に障がいのある人達だけでなく、道を歩く人達も車を運転する人達も、通行しづらくなります。でも、道が広いと、障がいのある人も、ない人もお互いに通行しやすく、気持ちの良い環境作りが出来るようになります。私は思います。

三つ目は、手すりをつける事です。障がいのある人達が坂道や転びやすい道などで自分の力で歩きやすくなるように、小さな気づきかきも必要だと思ったからです。

四つ目は、電車やバスなど公共の場所での思いやりについてです。先日、車いすの方がバスに乗ろうとした時、運転手さんが、拒否したというニュースを見ました。私はそのニュースを見て、ひどいなと思いました。それは、私達だけでなく、もし私とその立場だったら歩行者と車いすの人達を差別しているように感じて、心が傷つくと思います。健康な人も障がいのある人にも差別することなく、どちらにも思いや

りのある行動ができるようにしていきたいです。

最後は、障がいのある人達も、安心・安全な世の中を作る事です。私達が作ることはもちろん、障がいのある人達と出来る限りお互いに協力して、意見を言い合い、がんばりたいです。しかし、そう思わない人もいるかもしれません。そう思っている人が少なくても、私は、協力して「いっしょにがんばろう」「みんなでもっと住みやすい世の中を作っていこう」「こんなことを思っている人をたくさんふやしていけるように自分は見本となり、行動していきたいです。例えば、まず、ごみを拾う、そうじをする、何かを手伝うなどの小さなことからがんばっていきたいです。そして、その思いやりの気持ちで積み木のように、どんどん積み重なっていき、住みやすい世の中にしていけたら良いなと私は思います。

これからの未来は、希望の積み木を一個一個持って、みんなが積み重ねていく。また、やさしさがあふれる日本にしたいです。そのために、私達のような小学生でも出来ることを、一生懸命に進んでやりたいです。

誰もが自分らしく生きる

郡山市立富田中学校 二年 菅野 明里

「はい、お土産。」

父が、お菓子の箱をもって帰ってきた。箱を開けてみると、丁寧に包装された焼きドーナツが、宝石のように大切に並べられていた。私は、「食べるのがもったいないな。」と思いつながら、桜色のドーナツを選んで一口食べた。やさしい甘さが、口いっぱいに広がり、幸せな気持ちになった。このドーナツは、沢山の人を笑顔に出来ると感じた。父の話で、このドーナツは、障がいのある方が作ったことを知った。地域の人に、とても愛されているお店でいつも笑顔があふれているそうだ。私も、是非、作っている方に会って、お話をしてみたい気持ちになった。ドーナツを食べて、幸せになったことを伝えたくなった。

母が以前に勤めていた会社には、障がいのある方がいて、母は、いつも自分が出ることは何か考えていたが、車いすの方のインタビュー記事を読み、衝撃を受けたことを話してくれた。その記事には、障がいは、「持っている」ものでも、「抱える」ものでもなく、「環境」なのだと言うこと。環境を変えることが困難な場合は、「ハート」を変えることだとあ

った。レストランでは、食事に来た車いすのお客様は、車いすのままと決めつけることが多いが、人によっては、体勢を変えて椅子に座って食事をしたいと考える人もいる。相手に親切にしたいと考えてとった行動も、実は、決めつけになってしまう場合もあるのだ。記事を読んだ母は、障がいのある方に、「お手伝いすることがあったら、いつでも声を掛けて下さい。」と話をした。しばらくして、その方が、グループの仲間に、自分が持っている仕事と、手を貸してほしいリストを作り配っていた。周りの人も、これが大変だったのかと、気づいたそうだ。お互いが、思いやる気持ちがあれば、障がいのある人も健常者の人といっしょに、仕事出来るのだ。母は、その後も、車いすの方が、自分の車で、休憩をしていることを知り、横になれるスペースを作ってほしいと提案したようだ。母は、「理想の社会がここにはある。」と感じていたが、祖父の病気で、退職を決断した。その時、障がいのある方から、「自分のことも大切にしてくださいね。」と声をかけられた。母は、自分が健康でなければ、周りに何もすることはできないと気づかされた。

私にも昨年、すてきな出会いがあった。教育講演ライブで来校された、増田太郎さんだ。太郎さんは、二十歳で視力を失ったが、音楽で、沢山の人に勇気を与えている。ライブ途中で、音響トラブルがあった時、太郎さんは、「もう一度初めからやろう、アクシデントがあっても、盛り上がっていい。」と言った。私は人生の中で、色々な大変なことが起きても、それをどう受け止めて行動するかで、人生は変わっていくのだろうと感じた。この秋に、再び、太郎さんが来校される。学校の校門をくぐっただけで、学校の雰囲気分かる太郎さんのお話と音楽を楽しむにしている。

人間は、誰でも、病気になるし、年も取る。でもその時、今まで通りに、住みなれた地域に住み、やりがいのある仕事を続け、自分らしく生きることが出来たら、すばらしい人生だと思う。障がいのある人も、お年寄りも、子供も、大人も、同じ地域で、助け合いながら暮らせる社会が理想なのだと思う。お互いに、思いやる心があれば、理想の社会を作っていると感じている。

私もこれから、「バリア」が「バリュー」となるすばらしい日本の未来を作る人間の一人となれるよう、今、自分のすべきことを考え、周りの人に感謝の気持ち忘れずに、頑張っていきたいと思う。

障がいのある人に何ができるか

郡山市立富田中学校 三年 角田 凜

小学四年生のとき、障がいのある人も無い人も同じ人間だということには分かっているけど、私達障がいの無い人達は、障がいのある人に何が出来るだろう、と考えました。私は障がいのない人だから何をすれば良いかわからないな、と思いました。

四年生の授業参観で、いくつかのグループに分かれて社会について考えたことを発表するという授業がありました。私は障がいのある人についてのグループに入り、グループで発表するための準備を進めていきました。おうちで障がいの種類や、施設、障がいのある人のためにどんなことをしているのか、などをインターネットで調べたり、みんなで大きな模造紙にそれをまとめたり、それに沿って原稿を書いたりしました。私は、障がいのある人のために何が出来るか、についての原稿を書く担当でした。私は、

「障がいのある人のために、将来誰かがスロープという緩やかな坂をつくってあげたり、障がいのある人のための施設を増やすと良いと思います。」

というふうに書きました。その原稿を、先生に提出したら、

「誰かがやるの？あなたにできることはないの？」と問われました。考えても、私はその答えが分かりませんでした。

それから中学三年生になった今までに、障がいのある人生活の中や、目の障がいの人と盲導犬の授業、テレビなどで見ってきました。見る度に四年生のあのときのことや頭に浮かびました。

いくつかの夏に、テレビで耳の不自由な女の子がチャダンスに挑戦しているのを見ました。その子は本当に耳が聞こえないのかと思うくらい、仲間と一緒に楽しそうに、堂々と披露していました。それを見て、障がいのある人もない人も何も変わらないんだな、と改めて感じました。そう感じたときに、わたしたちにできることは障がいのある人も同じ人間であることを忘れないことではないかと思いました。たとえば、障がいを持っていても、私達と変わらない一人の人間で、一生懸命に生きていくということを忘れずに接することが大事なのではないかと考えました。そう考えたときに、私は今までそれができていたのかと振り返りました。私はこのことに気づくまでは、身近にいた障がいのある人を可哀想とい

うふうに思っていました。だからといって、普通に声をかけたり、同じ人間として接したりすることもできていませんでした。同情ばかりして、なにかその人のためにすることもありませんでした。

私は小学四年生から長い間、障がいのある人に何が出来るか、答えを見つけることができずにいましたが、この大切なことに気づくことができず本当によかったと思いました。そして、自分が障がいのある人に失礼なことをしていたという過ちに気づけてよかったと思いました。同情は思いやりなんかじゃなくて、偏見と何も変わらないことを知りました。

これからの生活の中で、この気づけたことをしっかりと胸に刻み、障がいのある人も無い人も平等な社会に繋がるような行動をしていきます。障がいのある人も無い人も平等な関係を築けるように接していきます。

私は将来、医療系のお仕事に就きたいと考えています。仕事の中で、障がいのある人に関わることがたくさんあるかもしれない。そんなときも、「子供の頃あんなことに気づいたな。」と思いついて、障がいのある人とも無い人とも何も変わらない態度で接していきたいです。

障がいのある人も無い人も同じ人間で、仲間であることに気づけたことは、私のこれからの生き方にプラスになる、良い経験になりました。このことをたくさんの人に知ってもら

いたいです。障がいがある、ない関係なく、みんな一生懸命生きています。それを世界中のみんなが忘れずにこれからの生活に結びつけていけば、偏見のない平等で温かい社会を、みんなの心がひとつになる社会を築くことができるのではないのでしょうか。私は、今日も明日も、これから先も、よりよい社会に繋がるような行動を心がけていきたいです。

心のバリアフリー

私は小学生のときにバリアフリーについて学んだ。バリアフリーとは、高齢者や身体が不自由な方々がより生活しやすくできる環境作りである。

身近な場所にも、配慮されていることは多々ある。私が利用するスーパ―には、様々な工夫がされている。車椅子の人のためのスロープがあったり、駐車場には障がい者や妊婦、高齢者専用の駐車場がある。その場所は、お店の出入り口付近にありスーパ―も広くなっている。また、スーパ―の入り口には、店員さんと呼ぶことができるインターホンがある。これは、何か不自由なことがある方が店員さんと一緒に買い物ができる工夫なのだ。実際利用する人にとっては、とても便利なかかもしれない。しかし、サービスを利用していない人もいるかもしれない。それには、サービスの案内の認識の不足もあるが、使う方の心の問題もあるかもしれない。

私の曾祖母は、歩くことはできるが歩くスピードはゆっくりである。また、長い距離を歩くのは大変なので、手押し車や車椅子を使うことがある。一緒に出かけた時に、「早く目

的地に着きたい」という私の欲求があったため、

「ひいおばあちゃん。車椅子に乗った方がいいよ。」

と声をかけたことがあった。でも、ひいおばあちゃんはゆっくりでも私と一緒に歩きたかったこと、歩ける自分のプライドがあったことに後々気付いた。「何であんなことを言ってしまったんだろう」と反省した。でも、ひいおばあちゃんも自分が歩くことによって転んだりして怪我をした方が迷惑になると考えたらしい。相手の立場を思いやることで、お互いに良い環境を作ることが出来ると感じた。

今では、ひいおばあちゃんから、

「車椅子に乗るね。後ろ押してね。押ししてもらいながら色々お話しよう。」

と声をかけてくれる。私も素直に、車椅子を押して会話を楽しんでる。

また、最近は何角で会った初対面の障がい者に対して軽蔑した態度をとり、何もしていなくても暴行が加えられることがあるとニュースで報道された。さらに、バスに乗車しよう

としても運転手から乗車を拒否されたという事実もある。私は「障がい者は健全な人が当たり前前にできていることをできていないから劣っている」と軽蔑の眼差しを向けるのは、間違いだと思う。障がいのある方でも、健常人よりも優れた能力や才能を持っている人は多くいるのだ。誰もがいつ病気になるのかは分からないし、この世界に生きている人全員に未知の可能性はあるのだ。また、障がいを持っている方も障がいを持ちたくてもっているわけではない。障がいを持っている方を悪く思う人がいるということを直すため、一人一人が障がい者との関わりを見直したりすることも大切だと思う。手助けが必要な人に助けを求められたときに、私はさつと手を差し伸べられる人になりたい。そのためには、周りへの思いやりと気配りができるように常に自分が一番ではなく、相手の立場を考えながら行動していきたい。

障がいを持つ方のために、便利で立派な環境を整えることはとても重要だと思う。しかし、障がいに対する悪いイメージを持っている人もいる。偏見のない世の中にするためには、正しい知識を身につけるべきだ。そして、相手の立場にたった思いやりのある行動をすることでお互いに笑顔になると思う。その笑顔を増やすため、一人一人の心がけが必要だ。利用する人が気持ち良く使えるように「心」に寄り添うことが一番大切だと思う。

私達にできること

私達にとって耳が聞こえない、目が見えないといった障害のある生活というのは想像できないものです。みなさんは障がい者についてどんな考えを持っていますか。みなさんはそんな方々にどう接して、どんな親切なことをしていますか。人それぞれに抱く感情や思いはさまざまだと思います。

私は、障がい者についてどんな考えを持っているかと言われてもすぐには思いつくことができませんでした。しかし、六月に聴覚支援学校の生徒との交流会で、ある考えを持つようになりました。最初はうまく、コミュニケーションがとれるかとても不安でした。交流会前に行った出前授業では実際に「障がいを持った生徒がどのように聞こえているか」といった疑似体験を行いました。声がまったく聞こえないので、口の動きを見て判断しました。この体験から実際に交流するときには、口を大きく開けてゆっくりと話すことを心がけようと思いました。そのおかげで当日はどうコミュニケーションをとればいだろうか、不安にはなりませんでしたが、う

郡山市立片平中学校 三年 佐々木 麗奈

まく伝えることができませんでした。絵を描く交流で、私達の班は「火の鳥」を描きました。聴覚支援学校の生徒がたくさんアイデアを出してくれて、みんなでコミュニケーションを取りながらスムーズに進めることができました。一緒に作業している内に聞き取りづらかった言葉もはつきり分かるようになりました。支援学校の生徒たちはそれぞれ出来ることを前向きに一生懸命がんばっていました。みんなで協力し、とても思い出に残る作品が出来ました。バスを待っている間に支援学校の生徒が私の自己紹介カードを見て話しかけてくれました。他にもたくさん生徒と話しました。支援学校の生徒が積極的に声をかけてくれて、会話がとても盛り上がり、とてもよい時間を過ごしました。

私はこの体験を通してどんな障がいを持つ人も障がいを持たない人もみんな一緒という考えを持ちました。当たり前、考えですが、実際そうだと思います。私達はどうしても障がい者の方々にマイナスのイメージを持ってしまいます。しかし、交流会ではプラスのイメージしか感じられません。

した。みんな幸せそうに、楽しく学校生活を送っていて、いつの間にか私は笑顔になっていました。この交流会を通して私は、小さなことでも良いから障がい者の方々の力になりたいと思いました。私が考えたことは、気をつかうのではなく、みんなと同じように接することです。変に気をつかうと障がい者の方々も気持ちはあまり良くないと思います。だから、いっそのこと普通に接することです。そうすれば障がい者の方々も気持ちが良いと思います。自分に何ができるのかを考えて支え合う、そういう認識を少しでも沢山の人がもてるようになれば、今まで以上にみんなが過ごしやすいなと思います。みなさんも自分に何かできることはあるか考えてみてくださいか。

理解の大切さ

郡山市立郡山第一中学校 三年 市村 麻結

この世界には多くの病気があります。そこで私が一つ注目した病気があります。「脊髄小脳変性症」という病気です。脊髄小脳変性症とは、小脳・脳幹・脊髄の神経細胞が変化し、ついに消えていってしまう病気です。症状は、ふらつきが激しくなり、進行が進めば一人で足をそろえて立つことができなくなってしまうです。たくさんある症状も少しずつ確実に進行し、最後には一日中ベッドの上で寝たままという状態に追い込まれます。また、五年〜十年で亡くなってしまうのが普通だそうです。治療法は見つかっていません。

平成十七年二月二十五日。「一リットルの涙」という文庫本が発行されました。この本は、脊髄小脳変性症の患者の一人である木藤亜也さんが、手が動かなくなる瞬間までノートに書き続けた日記をまとめたものです。また、ドラマ化もされテレビでも放送していました。私はこのドラマをきっかけに、脊髄小脳変性症を知り、亜也さんの日記を読んでとても心を打たれました。日記には、亜也さんが書いたたくさんの方の言葉が記されています。

病気はどうして私を選んだのだろう。

運命という言葉ではかたづけられないよう。

こんな病気でなかったら、恋だってできるでしょうに、だれかにすがりつきたくてたまらないのです。

タイムマシンを作って過去にもどりたい。

こう決断を自分に下すのに、少なくとも、一リットルの涙が必要だったし、これからはもっともっと思えます。いいじゃないか転んだって。また、起き上がればいいんだから。転んだついでに仰向いて、空を見上げてごらん。蒼い空が今日もお前の上に限りなく広がってほほえんでいるのが見えるだろう。お前は生きているんだ。胸に手をあててみる。ドキドキ音がする。心臓が動いている。嬉しいな。私は生きている。

人はそれぞれ言い知れぬ悩みがある。過去を思い出すと涙が出てきて困る。現実があまりにも残酷で敵しすぎて夢さえ与えてくれない。将来を想像するとまた別の涙が流れる。

この日記を読んだとき、亜也さんがどれだけつらかったか、

そして、障がいをもっていらっしゃる方々がどんな気持ちで毎日生活しているかがすごく分かりました。「一リットルの涙」は多くの方々、障がいをもっていらっしゃる方にとっても読んでほしいです。障がいをもっていらっしゃる方は、この日記を読むととても励まされ、元気をもらえるはずです。そして、この日記を読んだ人には、障がいをもっていらっしゃる人の気持ちがとても分かります。

私達は、障がいをもっていらっしゃる人の気持ちが全て分かるわけではありません。しかし、障がいをもっていらっしゃる人の気持ちを少しでも理解してくれる人が増えたら、障がいをもっていらっしゃる人の気持ちは少しでも軽くなると思います。普通に生活をしている私達も、障がいに関係がないと思っっている人も、ほんの少し理解することはとっても大切です。この世界中に、障がいについて、障がいをもっていらっしゃる人の気持ちを少しでも理解してくれる人が多くなることを私は願っています。



講評

福島県公立学校 退職校長会 郡山支部 顧問 津田 智

令和元年度「郡山市おもいやり作文コンクール」に、小・中学校の皆さんから多数の作文の応募があり、審査員一同、皆さんの福祉に寄せる積極的な思いに胸を打たれ、感動のうちに読ませていただきました。

作文募集のねらいは、「障がい者に対する理解を深めること」、「障がい者福祉を考える機会とすること」の二つがありますが、どの作品も募集のねらいをしっかりと受け止め、自らの経験や具体例と合わせて、心豊かに表現しており、障がい者への理解が一層ふくらんだのではないかと思います。

以下、その中を代表して最優秀作品に選ばれた作品について、審査員の評価をおりませながら感想を述べていきたいと思います。

小学校の部の最優秀作品は、芳山小学校五年の竹林芽咲さんの「手話を広めたい」でした。竹林さんは、身の回りに耳の聞こえない友達が大きいことを題材に、お母さんの影響を受け、手話サークルに通い、ろう者とのコミュニケーションについて考えています。そのため提案として、一つは手話を英語と同じように学校の授業に取り入れて、手話を小さい時から身近なものとする。二つ目は、大人にも手話を広めるために、お店や会社など社会全体で手話に取り組むことなどをあげています。

中学校の部の最優秀作品は、郡山第一中学校一年の小林杏奈さんの「心のバリアフリーを築こう」でした。小林さんは、会津に住む大好きな祖母が、突然「脳内出血」で倒れてから車椅子生活になったことを題に、祖母が生涯現役の料理人として頑張っている姿に啓発され、自分も学校のバドミントン部で頑張っていることと重ね合わせて表現し、真のバリアフリーについての考えをまとめています。そして、障がい者を守る設備も大事だが、障がい者と声をかけ合い、励まし合って、共に生きることの大切さを訴えています。

入賞した作品にも、身体障がい者やろう者との交流、ヘッドネーションやヘルプマークへの取組み、自閉症や発達障がいの子との関わり、特別支援学級との交流、東京の駅員さんのエピソード、小田原の世界で一つの石けんづくり、脊髄小脳変性患者の日記の引用を通して学んだことなど多彩な題材の作品がありました。中でも、注目して今後に生かしたい考えは、障がいも個性であること、障がい者を差別や

偏見で見ないこと、さらには、外形からは見えない障がいがあることなどに着目してまとめた作品もあったことです。

最後に、受賞された皆さんをはじめ、応募されたすべての皆さんの真剣な取り組みに讃辞を贈るとともに、ご指導くださった先生方やご協力いただいたご家族の皆様には厚く御礼を申し上げます。

入賞者名簿

【小学校の部】

賞	学校名	学年	氏名	題名
最優秀賞	芳山小学校	5	竹林 芽咲	手話を広めたい
優秀賞	芳山小学校	5	伊坂 菜花	みんなが住みやすい街
	富田西小学校	4	江川 楓花	みんなでやさしい気配りを
	大成小学校	5	渡辺 こまち	ろう者との交流
佳作	安積第一小学校	4	白井 温	見えないしょうがい
	安積第二小学校	6	佐藤 蓮	大丈夫ですか
	高瀬小学校	5	小林 綾莉	ヘッドネーションを通して
	芳賀小学校	6	丹野 彩音	発達障がい者について
	桜小学校	5	高橋 心優	住みやすい世の中とは

【中学校の部】

賞	学校名	学年	氏名	題名
最優秀賞	郡山第一中学校	1	小林 杏奈	心のバリアフリーを築こう
優秀賞	郡山第一中学校	1	小林 優	誰もが生きやすい社会にするために
	郡山第一中学校	2	菅野 涼羽	実際に経験することで
	郡山第一中学校	1	飯谷 梨央	世界にたった一つの石けん
	郡山第五中学校	1	近藤 愛歌	思いやりのある明るい未来 ～皆で社会を作ってる～
	郡山第六中学校	2	石塚 史	人と人をつなぐ力
佳作	富田中学校	3	角田 凜	障がいのある人に何ができるか
	富田中学校	2	菅野 明里	誰もが自分らしく生きる
	緑ヶ丘中学校	2	八代 麻友	心のバリアフリー
	片平中学校	3	佐々木 麗奈	私達にできること
	郡山第一中学校	3	市村 麻結	理解の大切さ

作文応募状況

【小学生の部】

4年	5年	6年	計
37	53	46	136

【中学生の部】

1年	2年	3年	計
66	59	60	185

応募総数	321
------	-----

令和元年度「郡山市おもいやり作文コンクール」実施要項

- 一 目的
障がいに対する関心を高め、障がい者福祉を考える機会として、市内の小・中学校の児童・生徒を対象に障がいに関する作文を公募し、優秀作品集を配布することにより、障がい者に対する理解を深めるとともに、児童・生徒の障がい者に対する意識の高揚を図る。
- 二 主催
郡山市
- 三 共催
郡山市教育委員会
- 四 募集対象及び部門
市内在住又は市内の学校に在学する小学生四年生から六年生まで及び中学生
(1) 小学生の部
(2) 中学生の部
- 五 募集作品
(1) 内容
障がいのある人と自分との関わりの中で感じたことや、障がいのある人にとっての暮らしやすいまちや福祉について考えていること等を表現した作文とするが、主題については、応募者の任意とする。
(2) 様式等
一人一点・四〇〇字詰め原稿用紙（B4判）縦書き四枚以内
- 六 応募方法
応募者は、応募票（様式1）と作文を各小・中学校に提出する。小・中学校は、応募者名簿（様式2）を作成の上、作文、応募票及び応募者名簿を提出する。
- 七 応募期限
(1) 児童・生徒から学校への提出期限 令和元年八月二十六日（月）
(2) 各学校から障がい福祉課への提出期限 令和元年九月一日（月）

八 応募先

郡山市 保健福祉部 障がい福祉課
〒九六三―八六〇― 郡山市朝日一丁目二十三番七号
TEL 九二四―二三八一

九 賞

最優秀賞二名（小学生・中学生 各一名）、優秀賞若干名、佳作若干名

十 審査

(1) 審査会

審査会の審査員は、四名とし、以下の者で構成する。

ア 郡山市 障がい福祉課長

イ 郡山市 学校教育推進課長より推薦された指導主事等 二名

ウ 福祉関係者 一名

なお、審査会会長は、障がい福祉課長とする。

(2) 審査基準

優秀作品の選考に当たっては、次の基準により行うものとする。

ア 障がい福祉に対する理解を深める趣旨に合致していること。

イ 誰でも分かりやすいこと。

ウ 豊かな表現力であること。

エ テーマによって必要とする基準については、審査員の協議により設けることができるものとする。

十一 その他

(1) 入賞者には、賞状及び記念品を授与する。

(2) 応募者には、参加賞を授与する。

令和元年度
郡山市おもいやり作文コンクール
優秀作品集

令和元年11月

■編集・発行／郡山市保健福祉部障がい福祉課
〒963-8601
郡山市朝日一丁目23番7号
電話：024-924-2381
FAX：024-933-2290
<http://www.city.koriyama.lg.jp>
■印刷／郡山市

みんなの文字®

この制作物は、みんなの文字を使用しています。
みんなの文字は、一般社団法人UCDAが「読みやすさ」を認証した書体です。

